

インド西部の女神祭祀にみる震災と復興

——インド西部地震被災地カッチの事例より

金谷美和

1 はじめに

ヴィクラム暦アシュヴィン月（9月～10月）の白半月までの9日間には、インド全土で女神祭祀が行われる。グジャラート州では、この祭祀をナヴァラートリー（Navratri）と呼ぶ。本稿は自然災害の被災地をコンタクト・ゾーンと位置づけ、2001年のインド西部地震後のカッチ県とその県庁所在都市ブジにおける被災者たち自身の復興のとりくみを、女神祭祀を通して明らかにする。

カッチは、2001年1月26日にマグニチュード6.9という巨大地震の震源地となり、県の中心地ブジの8割の建造物は倒壊し、16,500人の死者を出した。16世紀に建造されたカッチの王都であったブジは、人口過密であるために被害を大きくしたとみなされ、地震後、州政府によって城壁内部の旧市街より、郊外に建造された移住サイトに住民の移住が推進されている。州政府は、国連など国際機関からの復興援助をうけ、また非政府組織などとも協力しながら、地震から間もない時期にこの計画を進めていった。このような州政府による迅速な復興は評価されているものの、一方で様々な問題も引き起こしている。例えば、震災前に存在していた近隣ネットワークの切断がその一つである [Kanetani 2006]。

プラットは、植民地をコンタクト・ゾーン、つまりそれまで空間的・時間的に接触することのなかった対象との接触の場 [Pratt 1992:7] であるとみなし、コンタクト・ゾーンでどのような接触が生じていたかを、旅行記の分析から明らかにしようとしている。

自然災害の被災地は、まさにコンタクト・ゾーンであるとみなすことができる。なぜなら、復興期にある被災地においては、平常時には接することのない、外部からの圧倒的な経済的、政治的な力との接触が生じるからである。そのような外部からの力は、しばしばローカル社会の論理や、個人の土地や財産よりも優先される。被災地は、州政府が推進する復興計画に従わざるをえないが、その中でも地元の人々は自分たちの望ましい復興をめざしており、祭祀にそれを見ることができる。

筆者は、震災前よりカッチを博士論文のための調査地としていた¹⁾。震災後は、震災と復興の経験が、人々に何をもたらしたのかについての調査を行っている。人口約20万人の地方都市の社会関係は、村落とは異なり、より複雑で全体的な把握は難しいものの、祭祀という非日常に焦点を当てることで、より明確に捉えることができると考える。

米山俊直は、都市祭礼の人類学的研究の可能性について次のように述べている。都市民ないし都市生活者は、平常の社会の場においては状況に応じて部分的にしか参加していない。彼らと直接に接触してその本音が聞けるのは、災害や事故のような危機的状況か、さもなければ祭礼のような機会だけと考えられ、そのうち祭礼は、都市社会の研究者にとって貴重な参加観察の機会になる。その社会のもっている人間関係や集団の構造を理解し、人々の意識を知ることができ、さらにそこに内在する葛藤や緊張関係なども発見することが可能になるだろう、と述べている [米山 1986:18]。

本稿では、都市祭礼としての女神祭祀に注目し、ブジ市の社会構造と住民の震災経験について明らかにすることをめざす。

インドで秋に行われる女神祭祀の、マハーバーラタに従った解釈は、女神たちが力をあわせて水牛の形状をした魔神マヒシャスラを退治するというものである [永ノ尾 1993]。しかしカッチでは、このようなマハーバーラタと女神祭祀の関わりは薄い。唯一その関わりは、10日目にラージプートによって行われるシャーマー儀礼という剣を奉る儀礼に見いだされるのみである²⁾。

カッチでは、女神祭祀は王の祭祀を中心にして、カースト、家庭、近隣、個人というそれぞれの層において同時進行で祭祀が行われる複層的なものである。カッチの女神祭祀の中心にあるのが、ガルバ (*garba* 単数形は *garbo*) である。ガルバとは、女神に捧げる土器の壺であり、同時に女神に奉納する唄や踊りのことも意味する。グジャラートでは、一般にガルバ・ダンスと呼ばれる舞踊がこの時期に舞われることで有名である。女神祭祀の行われる9日間には、個人は、カースト、家庭、近隣などの集団の祭祀に参加し、かつ個人として巡礼にも参加する。このように、個人は複数の集団に帰属し、それぞれの集団の中で祭祀に参加している。このことから、女神祭祀は、個人にとっては自分の所属する複数の集団が互いに重なり合う領域であるとみなすことができる。本稿では、このような複層的な祭祀のうち、王権儀礼と結びついた祭祀、巡礼、近隣の祭祀に焦点を当てる。

王の祭祀の中心は、カッチの王国の守護神と言われるアシャプラー女神に対して、王が供儀祭主として執り行う供儀である。この女神の守護をうけて、カッチ王国が制定されたという伝説がある。かつては動物（水牛）供儀が行われていたが、現在はココナツと小麦の苗が火にくべられて女神に捧げられる。

すでに先行研究では、王が中心となる供儀は王権儀礼として解釈されている。女神が王国の守護神であり、王が供儀を行うことで女神と一体化し、王国の繁栄と安寧を祝うというのである [Fuller 1992]。村落における女神祭祀も、首長を中心として、それにサービス・カーストが参加して女神に対する供儀が行われるのは、王権モデルとして捉えられてきた [Raheja 1988]。三尾稔は村落での女神祭祀において、首長が祭礼の中心でなくなった事例について論じ、藩王国の廃止や農地改革によって引き起こされた、王権的な社会関係の衰退であると捉えている [三尾 1994]。外川昌彦は、ベンガルの都市において女神祭祀は、王の祭祀から民衆の祭祀に移行していると指摘している [外川 1992]。

カッチにおいても、藩王国は1948年に廃止され、事実上、王は存在しなくなった。しかし、亡くなった元王の息子が、「王」として現在でもアシャプラー女神に対する祭祀の中

心である。このことは、大地震というカッチ全土の災害を経験して、人々がカッチの守護神であるアシャプラー女神への信仰を改めて認識し、女神を奉る主体である「王」の役割が重視されたとみなすことができる。一方で、女神祭祀の期間中、アシャプラー女神への個人の巡礼者の数は年々増加している。巡礼は、王や村の首長のような媒介者を必要としない個人と対象の神との直接的な関係であり、より平等で個人的な信仰の形態であるとみなされている〔中谷 2006〕。カッチでは、女神を奉る主体である「王」の役割を重視する王権儀礼と、アシャプラー女神に直接対峙し、願掛けを行ったり、人生の幸福を願ったりする、個人的な信仰の形が、同じ女神をめぐる同時進行している。

近隣の祭祀に関しては、ブジの街の震災被害と都市計画による物理的な変化が、祭祀に明らかに変化を促している。一つには、城壁内部の旧市街のガルバ・ダンスが衰退して、移住サイトに復活し、新しい地縁の祭りとして開催されていることである。

災害後の社会変化を祭礼から明らかにしようとする研究は、阪神・淡路大震災後の地蔵盆に注目した森栗茂一の研究以外にはほとんど見られない。森栗は、地震の被害が大きく、住民がもとの場所に再建できない期間中も、地蔵盆にはもとの地域に戻って行っていることから、地蔵盆が地域コミュニティの要になっていると述べている。カッチの女神祭祀においても、近隣祭祀は、現在進行中であるブジの街の住民の移動に伴って人々を結びつける核として機能していると言える。

カッチの女神祭祀は、複層的なものであると述べた。それは、王の祭祀、巡礼、カーストの祭祀、家庭祭祀、近隣の祭祀である。次に順番にその祭祀を見ていきたい。

次章では、王を中心とする祭祀について述べ、3章では巡礼、4章ではカーストの祭祀、5章では家庭祭祀、6章では近隣祭祀について論じる。

2 王の祭祀

2-1 女神と祭祀の場所

王の祭祀では、カッチの守護神であるアシャプラー女神に対して祭祀が行われる。女神の奉られている場所は、ブジから北西に100キロメートルほど離れたマタ・ノ・マドゥである。マタ・ノ・マドゥは、「女神の場所」という意味である。女神は、自然石の形状をしており、それが赤色に塗られ、装飾品と赤い布をまとった姿で寺院に安置されている。この自然石の形状については次のような神話がある。

1500年前、現在のラージャスタン州に位置するマルワール地方から、デーヴチャンドという一人のカラード・ワニヤーが来た。彼は、商売のためにこの地を訪れ、現在の女神寺院が建っているまさにその場所に足をとめた。彼は、アンバー女神の崇拝者であったために、「ナヴァラートリー」の9日間をそこで過ごそうとしたのであった。彼は子供がいなかったために、子供が授かるようにと常に女神に祈っていた。その晩、彼の夢の中に女神が現れて、この場所に寺院を建立するようと言った。その夢が本当であることを示すために、女神は次のことも言った。夢からさめるとあなたはココ

ナツとチュンダリー (*cumḍaḍī* 絞り染めで染色された赤い色の布) を見つけるでしょうと。女神はまた、特別な注意を彼に与えた。それは、女神は姿を現すのに時間がかかるために、寺院が完成した後、扉を6ヶ月間閉めておいて、決して開けてはならないというものであった。しかし、その6ヶ月の期限まであと数ヶ月を残すのみとなった時に、夜毎日没から夜にかけて、えも言われぬ音楽が閉ざされた扉の向こうから聞こえてきた。デーヴチャンドは、とうとう我慢できなくなって寺院の扉を開けてしまった。そこで彼が見たものは、女神が地面からまさに膝をついて立ち上がろうとした姿であった [Hinmatsinhji 2005]。

しばしば誤解されるのであるが、アシャプラー女神は、王族のクラン神ではない。王族のクラン神は別にあり、名前をモマイ・マターという。アシャプラー女神がカッチ全土の女神となり、王がそれを奉るようになった由来がある。

スインドから来たラージプートたちがカッチをめぐる勢力争いをしている時に、サマ族ジャレジャー・クランの若者が、オジであるラーウルとの戦の中で、武勇を頼んだのがアシャプラー女神であった。その戦に勝って1510年にカッチの王となったケンガルジー1世(在位 1510-1548)が、アシャプラー女神に対する供犠を始めたとされている。

現在のマタ・ノ・マドゥには、アシャプラー女神寺院以外に、ヒングラージー女神寺院、チャチュラ・クンド・バワニー、カティラー・バワニー、ジャーゴラ・バワニーがあり、アシャプラー寺院の参道には店が建ち並び、小さな集落もある。マタ・ノ・マドゥは、王(*rāo*)から司祭長(*rājā*)に領地(*jāgīr*)として与えられたものである。

この司祭長は、ブラーマンではなく、カパリー(*kapadī*)と呼ばれる一族である。カパリーの二つの父系親族のうち、一つは司祭長になり、もう一つは寺院の管理人(*bhuvā*)になったという。寺院への奉納品はすべて管理人がもらうことになっている。次期司祭長は、カパリー一族から選ばれ、弟子(*celo*)と呼ばれる。ただし、カパリーの家系は絶えようとしており、現在弟子はいない。王族や州議会議員などで構成されている女神領地トラストという組織があり、そこが女神寺院とその領地の運営を行っている。

寺院境内には、女神本殿の他に、司祭長の居所、巡礼者の宿泊施設、社務所などがある。女神が安置されている本殿は、毎朝扉が開けられて、女神に赤い絞り染め布が着せられ宝飾品や花で装飾される。また毎夕、女神の宝飾品ははずされ、扉が閉められる。女神祭祀の期間は、女神の衣服は毎日取り替えられる。

チュンダリーとは、アシャプラー女神の神話にも女神の印として表れたように、花嫁衣装に用いられる絞り染めで染色された赤色の頭被いの布のことで、グジャラート一円において、既婚で寡婦でない女性(*suhāgan*)の吉祥性と結びつけられている [金谷 2005c]。女神への奉納品として、チュンダリーは好まれており、参道の売店で販売されている。

ブジの王宮の近くに、400年前に建造されたとされる、もう一つのアシャプラー女神寺院がある。マタ・ノ・マドゥが遠すぎて、ブジからは頻繁に参拝できないことから、王が毎日見る(*darśan*)ことができるようにとブジに建立された寺院である。

女神祭祀には、王族の男性が1人ずつ、マタ・ノ・マドゥのアシャプラー女神と、ブジ

のアシャプラー女神の両方に、祭祀を行うために赴かなければならない。

もう一つ、王の祭祀に関わる場所は、ブジの王宮内にある寺院 (*tilak maheli*) である。王族であるジャレジャーのクラン女神であるモマイ女神が奉られている。女神はどれも小さな石が朱色に塗られたものであり、それが多数安置されている。王族が戦の中でも女神を奉ることができるように携帯可能な形状となったと言われる。ティラク・マヘリの名前の由来は、王が即位するときに、この場所で額に朱い円 (*tilak*) をつけられることから来ている。朱い円をつけるのは不可触民に属する者であったという。

2-2 王の祭祀過程

次に、2005年10月に行った調査をもとに、王の祭祀の過程を詳しく見たい。携わっているのは、供犠祭主の王族男性であるプラグマンジー 3 世、司祭長であるヨーギンドラ・シンである。

なお、現在は王政は廃止され、制度的には王は存在しない。しかし女神祭祀の際には、女神を奉る供犠祭主としての王の役割が重要視されており、そのために、本稿では王族男性であるプラグマンジー 3 世を、儀礼上の「王」として、記述することにする。

①前日

女神祭祀の始まる前夜には、マタ・ノ・マドゥにて壺儀礼 (*gaḍh sthāpnā*) という儀礼が行われる。ガッドとは、容器、壺という意味であり、そこに女神が勧請される。女神の奉られた寺院本堂の向かって右側に位置するガッディ (壺のおかれた場所) において行われる儀礼である。これには王は参加しない。

夜11時15分より15分間行われる。まず、女神の前で司祭長と司祭が、剣をもって清める儀礼を行う。この儀礼には、ラージプートの人々のみが参加することができる。この儀礼が行われている間、寺院の柵は閉じられ、警備員が柵の周囲に立って、他の参拝客がはいらないようにする。次に司祭長と司祭が、ガッディに赴き、そこの畑 (*vāḍi*) に小麦の種をまく。畑の上には女神を勧請する壺がおかれている。この畑にまかれた種が8日目に苗 (*javārā*) に育ち、女神に捧げられる。

また、ガッディでは、司祭長の後継者であるとみなされた弟子が、女神祭祀の期間に苦行を行う。苦行は、ガルバの灯がともされる夕刻から行われ、8日の間、1日2回のヨーグルト以外に食事をとらず、席についたまま動いてはいけなかったという。弟子は、手にココナツと剣 (*khadaḥ*) をもって苦行に挑むため、剣をもつ者 (*khadaḥ dhāri*) と呼ばれる。現在は、弟子がいないためにこの苦行は行われていない。苦行ではあったが、司祭長の後継者とみなされたものだけができるため、弟子に選ばれるのは名誉なことであったという [Dilipsinhji 2004]。

この壺儀礼が行われることで、女神祭祀は始まる。つまり、夜11時過ぎにこの儀礼が行われ、0時が過ぎて翌日になると女神祭祀が始まると考えられているのである。

② 5 日目

5 日目には、朝 8 時 15 分頃より、王によって、ブジの王宮内寺院にて、扇儀礼 (*chammar*) が行われる。チャンマルとは、孔雀の羽軸を束ねた扇で、普段は女神のそばに安置されているが、それが 1 年に 1 回、女神祭祀の際に、新しいものに取り替えられるのである。扇は 3 つあり、一つは王宮内寺院、一つはマタ・ノ・マドゥのアシャプラー寺院、もう一つはブジのアシャプラー寺院にある。この三つとも、取り替える際には、まず王宮内寺院にて清めた後、各寺院に王族男性によって持参されるのである。5 日目のこの日は、マタ・ノ・マドゥに持参する扇を王宮内寺院にて儀礼を行い、7 日目にマタ・ノ・マドゥに持参する。8 日目には、ブジのアシャプラー寺院に持参される扇儀礼が王宮内寺院で行われ、アシャプラー寺院に持参される。また、同じ 8 日目には、王宮内寺院の扇も取り替えられる。

かつては 2 日間かけて牛車に乗って、扇をマタ・ノ・マドゥに運んだために、2 日前の 5 日目の朝にブジの王宮を出発した。その名残で、現在でも扇儀礼は 5 日目に行われるが、扇は秘書によって車でマタ・ノ・マドゥに運ばれ、王自身は、7 日目に車でマタ・ノ・マドゥに赴き、8 日目に寺院の外から扇を自ら運んで女神のところに届けるのである。

儀礼を執り行うのは、王宮内寺院の司祭と王である。モマイ女神のご神体の前に二つ畑が作られ、小麦の種がまかれ小さな芽を出している。畑の上には、女神を勧請する壺であるガッドが安置されている。王から司祭を介して、女神に乳油や花が供えられる。最後に王は、新しい扇の根本に花をはさみ、扇を灯火にかざしながら回す。そして王は扇を右肩に担いで寺院を出て、太鼓をたたいて王を先導する太鼓たたき (*jāgariyo*) の後を、王は裸足で歩く。秘書が王の頭にゴル紙幣をかざして、紙幣を太鼓たたきに与える (*gor*)。王は王宮の城門のところまで歩き、そこで待ちかまえていたアシャプラー女神学校の生徒たちによって、花輪をかけられた後、地元新聞記者のインタビューに答えた。³⁾

③ 7 日目

王が、マタ・ノ・マドゥに車で到着し、夕方 6 時半頃、王と王妃の参加のもと、司祭長がアシャプラー女神に灯明を供える (*ārti*)。王はその後、王の宿泊所 (*mahel*) に投宿し、夜に行われる護摩を焚く儀礼 (*hāvan*) には同席しない。寺院の境内には、巡礼者が大勢やってきて、巡礼者を世話するボランティアの人々が、食事の準備をし、振る舞う。

19 時 50 分頃、司祭長が居所から松明と太鼓の先導で現れ、女神寺院に向かう。司祭が司祭長の額に朱い円をつけ、それから司祭長が女神に灯明を供える。20 時 15 分頃、司祭長が護摩壇にやってくる。護摩壇は、5 メートル四方で周囲より 50 センチくらい高くなっている。鉄の柵で囲まれており、そこに椰子の葉でふいた屋根と布のテントが張られており、上部は開いている。火を焚く場所は、白く塗られ、その上に黄色と赤色で文様が描かれている。カッチの様々な地域から来た 15 人の司祭が地面に座り、司祭長はいすに座っている。司祭長は、赤と黄色の縞模様の縹子織り布で作られた特別な帽子を被り、上半身には白い布を巻き付け、下半身には腰布をまとっている。柵の周囲は、ラージプート、その外側に一般の巡礼客が座って待っている。

20時半より護摩が焚かれ始め、マイクを用いて、マントラが唱えられる。司祭長がゴマ、乳油、小麦の殻を混ぜたものを次々と護摩壇にくべる。22時10分頃に一旦5分ほど休憩となる。その後、寺院内の畑に育った小麦の苗が刈り取られ、護摩壇にもちこまれる。司祭たちは、片隅に集まって、苗を一束ずつもち、大皿の水に振り入れては出すという行為を繰り返す。その間にもマントラは続き、司祭長はゴマ、乳油、小麦の殻を火にくべ続ける。

苗を水に振り入れるのが終わり、司祭たちはもとの席に戻る。そして、司祭長は、花、果物、キンマの葉を次々と火にくべる。このまま0時を過ぎて、日付が変わる。

0時10分、砂糖と牛乳を入れた皿に苗を入れ、それが護摩に投げられる。0時14分、司祭長が、赤い絞り染め布にくるんだココナツを、木の柄杓に載せ、その上に乳油をかけ花を載せる。0時15分に鐘が鳴らされ、司祭長は、皿に載せた灯火を回す。その皿はもち出され、人々は灯火に手をかざしてそれを頭にあてたり、皿に紙幣やコインを入れたりする。

護摩は大きく燃やされ、警備員が巡礼者たちの間に配備され、クライマックスが近づいたことがわかる。0時26分、司祭長が立ち上がり、赤い絞り染め布を巻いたココナツが火に投げられる。太鼓が鳴らされ、巡礼者たちの間から、女神をたたえる歓声が沸き上がる。司祭長や司祭たちは火の中から薪をとりだし、その煤を互いの額につけあう。司祭長は太鼓を先導として、警備員に守られながら、その場を去る。そして、巡礼者たちは、護摩壇に殺到し、ある者は柵を乗り越え、残り火の一部や煤を受け取ろうとする。あまりに人が集まったために、一部の人々は一時は火に倒れ込みそうになって悲鳴があがり、警備員によって阻止されて、火の前には列が作られる。あるいは柵の間から手を伸ばして、司祭から煤をもらおうとする者もある。煤をもらった人は、家族に少しずつ分けてやる。私にも分けてくれる人がある。その瞬間を見るために多数の巡礼者がこの日に合わせてやってくる。ブジのアシャプラー寺院でも同時刻に護摩が焚かれる。

④ 8日目

朝になると、マタ・ノ・マドゥのアシャプラー女神寺院に、王自らが扇を届ける。朝8時半に、王がチャチュラ・クンドという井戸にて沐浴を行う。井戸の世話をし、王の沐浴の時に王の足を洗うのはムスリムのチャーキーに属する男性である。かつては、実際に王がここで衣服をぬいで井戸にはいったが、現在では、朝井戸からくみあげた水をチャーキー男性が居所に運び、そこで王は水浴びをする。このときは、王は井戸のそばまでやってきて、水にははいらずに引き返した。

次に、チャチュラ・バワニーにて儀礼を行う。そこは洞窟にうがたれた寺院で、女神像が安置されている。王が女神に対峙して座り、脇に苦行僧のような司祭が二人おり、太鼓たたきが数人控えている。女神の前には、扇、花、米、苗、朱色の粉、花輪がおかれている。女神に苗、干しぶどう、米、ナツメヤシ、ココナツなどが供えられる。

8時25分には、太鼓たたきによって太鼓と鐘がたたかれる。王がろうそくの火を女神の前で回す。王のターバンには苗が差し込まれる。扇の根本を女神のほうに向け、根本のところに苗が差し込まれる。扇が王に渡される。そして、王は扇を右肩に担いで、裸足で歩き出す。チャチュラ・バワニーから女神寺院まで約1キロメートルの道のりを、1時間近

くかけて王は裸足で歩いて扇を担がなければならない。

行列の先頭には、ムスリムの楽師カーストに居する男性3人が、太鼓と笛を鳴らし、次に8人の太鼓たたきたちの太鼓と鐘が続く。王の隣には秘書が付き添っており、王に日傘をさしかけてやる。秘書は紙幣を王の頭の上で回し、楽師が太鼓につけているスカーフの中に入れる。これはゴル（gor）と呼ばれる。一般にゴルは、紙幣を介して人物の罪や凶を、紙幣のもらい手に移譲すると解釈されている。紙幣は、太鼓たたきには与えられない。信者たちが王のそばに押し寄せるのを、ボランティアの人々が手を繋いで、人垣による柵を作り、王の歩みを守る。また、ボランティアの人々は、土の道にある大きな石や棘のある木の枝を、足で王の通り道からけり出す。土の道は平らではなく、所々ぬかるみもあって、靴を履いていても歩きにくい道であった。

9時25分に、王は女神寺院の門の前に到着し、そのまま女神の前に進み出る。司祭が女神に花輪をかける。このときは、司祭長は参加せず、司祭が儀礼を執り行う。太鼓と鐘がたたかれ、女神の前に王が対峙して立ち、女神の前で灯火を回す。

9時40分に、司祭が女神の右肩に青草（*patori*）をおく。王は自らの両肩に布をかけ、その布を顔の前に捧げもち、一段あがって、女神の右肩の前に立つ。青草が女神の肩から王の捧げる布に落ちると、王は女神からの祝福をうけたと捉えられている。

太鼓と鐘が大音量で鳴らされ、人々は手を合わせながら、王の後ろの寺院の狭い空間にひしめき合いながら、王と女神を見つめている。暑さと女神への人々の視線が相まって、寺院の中は熱気に包まれる。人々は女神を見ようと、目の前に立って視線を遮る人を押しのけ合いながら、立っている。王は、布をもったまま女神に向き合い立ちつくしている。次第に王の背中に汗がにじみ出してくる。時間がじりじりと過ぎていったが、人々は辛抱強く待ち続けている。ただ、合わせる手に力がはいる、人々はますます前にと押し寄せてくる。太鼓と鐘の音はますます強くなる。そこに立つ人々の頭が、暑さのせいでもうろうとしはじめた時に、王の身体が揺らいで、そのまま司祭に支えられながら、床に崩れていった。王が倒れたことが分かった。皆が心配しながら見守る中、王は連れ出され、いすに座らされて、人々は王に風を送ってやった。それが10時10分で、王が立ち始めて27分が過ぎていた。

その後、もう一度青草の束が、司祭によって女神の右肩におき直され、意識をとり戻した王が再度、女神の前に立つと、すぐに青草は女神の右肩から落ち、人々は「ジャイ・マタジー（女神に栄光あれ）」と叫んだ。司祭は王に水を振り、王はそれを掌にうけて飲み、手を頭にあてた。王は、女神の前を辞して畑に行き、そこで苗をうけとった。王は、司祭長の居住地を訪問し、そこで少し会話をし、ヒングラージー女神寺院に寄ってから、自分の居所に戻った。

次は司祭長が王の居所を訪問する。10時45分に司祭長は牛車に乗って、楽師二人の太鼓に先導されて、早足の速度で居所に行く。11時に司祭長が王のところに到着し、司祭長から王に菓子箱が贈られ、少し会話をした後、司祭長は牛車に乗って辞する。その後、王は車でブジに戻る。

同時刻に、ブジでも王族の男性親族が扇を王宮内寺院からアシャプラー寺院に運んで、

青草の束を用いた儀礼 (*patori*) を行った。また、王宮内寺院にて護摩と苗の刈り取りが行われた。

最後の儀礼は、ブジ王宮内寺院で行われる。夕方6時半に、王によって王宮内寺院に新しい扇が安置される。古い扇は水に流される。これが、女神祭祀の終了である。

女神の肩から青草が落ちる前に、王が倒れたという事件は、巡礼者たちには知らされなかった。この日、取材に訪れていた地元紙記者も知らず、新聞報道はされなかった。しかし、それを知った人々の間では、この事件は凶兆としてうけとめられた。女神寺院領地トラストのあるメンバーは、このように青草の儀礼に時間がかかったのは初めてのことで、良くないことであると浮かない顔をして私に語った。また、ある友人は、カッチに良くないことが起こるしるしだと、やはり顔を曇らせて語った。

3 巡礼

マタ・ノ・マドゥのアシャプラー女神寺院への巡礼 (*jātra*) が、女神祭祀の期間に盛んに行われる。女神祭祀前日頃より、巡礼者がマタ・ノ・マドゥのアシャプラー女神寺院に巡礼を行う。願掛けのためや、単に女神を視る (*darśan*) ためなど、人によって理由は様々である。ある女性は、子供が授かるようにと願掛けをして、巡礼を行い、子供が授かった後に、改めて巡礼を行ったという。

マタ・ノ・マドゥは、ブジからは100キロメートルの距離があり、成年の男性であると、朝早くブジを出発して、日中休まずに歩き続けると夜には寺院につく。夜は境内に泊まって、翌朝のバスでブジに戻ることができる。このようにして、忙しい中でも1日休暇をとって、毎年巡礼に行くという人がある。友人同士、家族同士で行く人もいる。人によっては、グジャラートの他の地域やムンバイから、徒歩で巡礼する者もあるという。

バスや自家用車、バイク、自転車でも巡礼する人もいるが、多くは徒歩でやってくる。徒歩による巡礼者を援助するために、ボランティアの人々が、沿道に救護所や水場、仮眠所、簡易トイレなどを設置する。また、自家用車やトラックで飲料水やジュースを運んで来て、配る人もいる。徒歩の巡礼者は、日中の暑さを避けて、昼は仮眠所で眠り、夜に歩く。車いすの巡礼者、幼い子供を手押し車に乗せて歩く巡礼者、赤ん坊を布にくるんで、夫婦でぶらさげて歩く巡礼者もある。沿道の巡礼者たちの喜びに満ちた熱狂的な雰囲気は、印象的である。人々は、「女神に栄光あれ」と書かれたオレンジ色のはちまきをしめて、行き交う人々ごとに挨拶をしあう。私がタクシーで、巡礼者たちを追い越すと、人々は、手を振ったり、「女神に栄光あれ」と挨拶してくれたりしたし、カメラを向けると、みな笑顔を見せてくれた。

巡礼者は、マタ・ノ・マドゥに到着すると、寺院の参道の売店で、女神に捧げる赤い絞り染め布、ココナツ、菓子を購入し、それを売店が貸してくれるステンレスの皿に載せて、女神に礼拝する。菓子は一部がお下がりとして返される。売店には、様々な女神グッズも売られている。女神のキーホルダーや、写真などである。

マタ・ノ・マドゥの女神寺院の境内には、巡礼者の世話をするために、女神祭祀の期間

に寺院に泊まり込む奉仕者たちがいる。私が出会ったある女性は、毎年女神祭祀の前後10日間、仕事を休んで来るという。また、女神祭祀期間の巡礼者たちへの食事の振る舞いは、ムンバイ在住のある裕福な商人が毎年出費を負担し、食材の買い付けから料理までのアレンジを行っているという。

4 カースト祭祀

これは、各カーストの寺院によって、それぞれの女神に対して行われる。ここでは、ブジのジェティ・カーストの事例を述べる。ジェティの伝統的な職業はレスラーであり、現在では公務員や小規模商店主などをしている人が多い。カースト寺院はブジのマーリー通りに面しており、カースト女神として、リームジャー女神を奉っている。

1日目には、カースト寺院にて、司祭によって畑が作られ小麦の種がまかれる。この畑は、本物の土を盛り上げて作られる。1日目から9日目まで毎夕8時からガルバが行われる。ガルバは、カーストによって異なるが、ジェティ・カーストの場合、ジェティ・カースト男性の「奉仕者」(*sevā karnuwala*)が女神に儀礼をし、女神の前で男性が賛歌を詠うことをガルバと呼ぶ。この期間、寺院内部には男性しかはいることができず、女性は寺院の外側に車座になって、男性の吟唱に合わせて拍手を行う。女性は賛歌を詠うことはしない。また、女神に菓子をお供えする。菓子箱は女神の前に供えられ、一部はお下がりとして参詣者に配られた後、供えた人によって持ち帰られる。女神のお下がりには、家族や友人たちに分けられる。

9日目には、寺院で朝7時から護摩（ココナツと苗が火にくべられる）が焚かれる。苗が刈り取られた後は、寺院の内部に女性もはいることができる。また、夕方7時半から女神に灯明をあげ、そのあと刈り取った苗を女神に捧げる。これが終わると、男性たちは、畑の土を一斉に寺院の隅に押しやり、片づけてしまう。人々に苗が配られ、子供たちは、苗を手にして年輩者の足下に手をおいて敬意を表する。また、苗を手にして互いに挨拶することで、1年間、相手に対して行った無礼をわびるという意味があるという。人々は、女神に礼拝した後、カースト全員がカースト会館にて会食を行う。

カッチ・メヘスワーリー・カーストの場合、毎夕刻、カースト会館で女神の絵を囲んで女性たちがガルバを踊る。太鼓をたたくのはムスリムの楽師カーストの女性である。吟唱をガルバと呼ぶ人々と、踊りをガルバと呼ぶ人々がいる。このことから女神に捧げられるもの（壺、歌、踊り）はすべてガルバと呼ばれることが分かる。

女神祭祀の夕刻、女性たちは誘い合ってよそゆきのサリーを着て寺院を訪れるために、あたりは晴れやかな雰囲気包まれる。

5 家庭祭祀

女神祭祀の1日目から、朝夕家庭ではガルバが行われる。ガルバとは、穴のあけられた土器の壺のことを指し、中にムング豆と砂糖、灯火が入れられる。このガルバを女神に捧

げて儀礼を行うこともガルバと呼ばれる。この壺は、女神祭祀の前日に、土器作りの女性たちによって、一斉に市場で販売されるもので、女神祭祀が始まると、市場では見かけられなくなる。土器は、素焼きであるが、焼いた後に、絵の具や小さな鏡のかけらで装飾される。蓋がついており、また土器の腹にあけられた小さな穴からは中に入れた灯火の火が漏れるようになっている。

女神は、家庭の台所に奉られており、女神にガルバを捧げ、灯火を供えることが9日間行われる。9日目に、女性たちがガルバを池に流す。ブジでは、ガルバはハミサール湖に流される。またこの期間、一部の人々は断食を行う。日中、果物、ミルク、ミルク製品以外を口にせず、夕刻に女神を奉ってから食事をとる。

6 近隣の祭祀

6-1 旧市街の祭祀

ブジの街には、ファリアー (*faliyā*) というものがある。ファリアーという言葉は、グジャラーティー語の辞書によると「道」という意味であるが、同時に近隣関係をさす言葉としても用いられている。このファリアーを単位として、ガルバが行われる。四つ辻になった広場のような場所をチョーク (*cōk*) というが、街のあちこちにガルバのための場所がしつらえられ、ガルビー・チョークと呼ばれる。広場の周りを天幕で囲い、中央に女神の絵と壺(ガルバ)が安置され、楽隊や音響設備がしつらえられ、電飾で飾られる。天幕の内側は、寺院内と同じように、土足で踏み入れることはできない。

ソニワール・ファリアーのガルバについて見てみよう。始まりは、夜の10時半頃である。ここではアシャプラー女神の絵が奉られている。まず女神に対して、男性たちがガルバ(女神への吟唱)を行う。それが終わると太鼓、キーボード、歌手が準備をして、女性たちが踊りの輪を作る。少女たちは、母親の心づくしの装飾品で、精一杯着飾り、結った髪に花をつけてもらって、ある者は恥ずかしそうに、ある者は得意げに踊りの輪にはいつている。

ガルバの費用は、ファリアーの人々の寄付によってまかなわれている。1日目から9日目まで毎夜プログラムがある。例えば、青い服を着て踊る晩であるとか、小さな少女たちの踊りの晩、あるいは決まった踊りを練習して、それを披露する晩などである。参加した子供たちには景品が与えられる。特に7日、8日、9日など後半の夜は、ファリアーの人々は、朝方まで踊って盛り上がる。2005年には、グジャラート州の裁判所命令で、夜10時以降の騒音が禁止され、ガルバ・ダンスを楽しむにする人々の不興を買っていたが、いざ女神祭祀が始まってみると、人々は夜半過ぎまでガルバを楽しんでいた。参加者は100人から200人の間である。

このファリアーごとのガルバの他に、少女 (*kanya*) によるガルバがある。毎夕、初潮前の少女たちが、ガルバを頭に載せて近隣の家々を訪れ、女神の名で小銭をもらう。かつては油をもらって、それを灯明祭 (*divālī*) の時に用いたと言われる。⁴⁾

6-2 移住サイトでの祭祀

2001年のインド西部地震でブジの旧市街の建物の8割が倒壊し、州政府は住民の旧市街から郊外への移住を積極的に促した。政府はブジの南部、旧市街から6キロメートル離れたところに、3つの移住サイトを建設した。また旧市街は、市街地計画が行われ、道路が拡張されるために、個人の住宅は、震災で被害をうけなかったものも立ち退きにあたり、土地を政府に提供せざるをえなくなったりした。路地の途中にあった小さい広場のうちいくつかは道路になってしまった。移住が進むにつれてファリアーの人口は減少し、旧市街のガルバが縮小したのに比べて、移住サイトでは、新しくできたファリアーをまとめるために、ガルバが開催されるようになった。

2004年には、移住サイトの一つであるムンドラ・ロード移住サイトにおいて、青年団が結成され、住宅地の空き地を利用してガルバが初めて開催された。青年団は40歳以下の男性で構成されており、2004年には7、8人のメンバーで始め、2005年にはメンバーは20人に増えた。すでに1000家族が旧市街から移住してきており、住民たちは自分たちの近隣関係の構築に前向きであった。このガルバは、住民たちが企画をし、スポンサーを募り、宝くじを作って資金を集め、実行したものである。2005年には住民の参加は活発で、その年のブジの最優秀ガルバ賞を受賞した。住民の1人は、ガルバの企画を通して新しい近隣関係が立ち上がったと感じており、自分たちのファリアーのまとまりを誇りに思うと述べた。

6-3 エンターテインメント化する祭祀

近隣祭祀として行われるガルバの一部は、エンターテインメント化している。そのうちの最大のものは、ロータリー・クラブの主催によるものである。それは震災の前年に、ブジ郊外にある私立学校の校庭で始まった。震災の後再開したこのガルバは、震災復興の市街地計画の一環として、州政府によって建築されたヒル・ガーデンという郊外の公園で行われるようになった。この公園は、ロータリー・クラブに払い下げられ、運営されている。

このガルバと、従来の近隣祭祀であるガルバとの最大の違いは、近隣祭祀において見られた女神像と女神像への奉納が存在しないことである。それまでの近隣祭祀においては、踊りの輪の中心には必ず女神像があり、踊りがいかに人々の娯楽的な楽しを提供しようとも、女神への賛歌から始まり、女神像に対する敬意が参加者たちに共有されていた。会場によっては、踊りの場所をすべて土足禁止にするところもあった。

ロータリー・クラブ主催のガルバは、商業主義が行き渡っている。2005年の調査時には、入場料を20ルピー、参加料を30ルピー徴収していた。そして参加者たちはすべて、競技にも参加することになっており、参加料と引き換えに番号札をもらって、それを衣服の目立つところに留めることになっていた。会場と見物場はロープで分けられ、見物客用にはいすが並べられていた。また食べ物や飲み物を販売するための屋台が出ていた。目玉は、参加者の競技であり、そのための審査員が複数会場内にいた。商品は、大型バイク3台であり、それが1等から3等に与えられることになっていた。

踊りは2ラウンド設定されていた。第1ラウンドは1時間で、輪が二重になるほど込み合って踊っていた。複数の審査員が輪の中にはいり、手にノートをもって審査をしている

のが見える。競技に勝ちたい踊り手は、男女共にグジャラートの手工芸で装飾した衣装を着用していた。女性はチャニヤ・チョーリー (*caṇiya colī*) と呼ばれるスカート、ブラウス、被り布を着用し、服には刺繍やきらきら光るスパンコールやミラーをつけている⁵⁾。男性は、牧畜民のような衣服と腰布をまとっているが、それにも刺繍など意匠が凝らされている。都市在住の中産階級にとって、同じカッチの住民とはいえ、牧畜民に接する機会も少なく、その衣装はエキゾチックでファッショナブルに感じられるのであろう。それらの衣装は、カッチの様々な牧畜民の衣装を混合させたもので、そこには都市住民が考えるカッチの〈伝統〉が表れていた。

踊りは、ダンディヤ・ラース (*ḍaṁḍiya rās*) と呼ばれるもので、2重の輪を作った踊り手が、両手に2本の棒をもって、向かい合った人と互いにうち鳴らし、次々に相手を換えながら踊っていくというものである。棒をうち鳴らす相手との呼吸が合うことが踊りの醍醐味であるが、ここでは参加者たちの注意は、踊りの相手ではなくて審査員に向けられ、笑みを絶やさず、他人とは違うことさらに目立った棒の振り方、ステップを踏むことに注意が向けられている。参加者の中には、目立つことを重視したあまり、刺繍やビーズをつけすぎて、重い衣装に身動きがとれないような女性もいた。ソニワールで見られたような、参加者自身が楽しむ姿勢、着飾って友達と一緒に踊る喜びはそこには見ることはできなかった。

私の尋ねたブジの人々は皆、ヒル・ガーデンのガルバ・ダンスが最も盛大で、見る価値があると勧めてくれた。ヒル・ガーデンは、住宅地から離れており、ブジや他の郊外の住宅地からの交通手段がないために、見物や参加のためには、自家用車やバイクが必要である。また、入場料と参加費を徴収することから、あらゆる人に開かれた場であるとは言い難く、むしろ中間層の娯楽の場として理解することができる。

7 おわりに

カッチ全土の女神としてのアシャプラー女神への儀礼における、供犠祭主としての王の役割は、依然として重視されている。カッチ藩王国は、イギリスの植民地下において存続していたが、インドの独立と共に、王政は廃止され、王は廃位となった。それにも関わらず、1948年に廃位となった王の息子であるプラグマンジー3世は、アシャプラー女神への儀礼を欠かさない。プラグマンジー3世は、現在はブジの王宮には居住せず、ブジから80キロメートル離れたマンドヴィーにある離宮、ビジャヤ・ヴィラスに居住している。しかし、プラグマンジー3世は、月に1度、ブジ王宮内寺院においてクラン神であるモマイ女神に対して毎月の儀礼を行った後、アシャプラー女神寺院も参拝することを欠かさない。

それと関連して、マタ・ノ・マドゥのアシャプラー女神寺院への巡礼は年々増加している。トラストによると、特に震災後巡礼者の数は増えているという。15～20年前まで2～3万人であったが、現在はそれをはるかに超えている。正確な統計はないが、2005年にはのべ70万人の食事を用意したという。もちろん、これは食事数であって、巡礼者数ではないために、単純に二つの数値を比較することはできない。

このように、個人が主体である巡礼と、王権儀礼が同じアシャプラー女神をめぐることで同時並行していることは興味深い。災害という危機を経験した人々の間で、カッチの守護女神に対する信仰実践がより盛んになっていると考えられる。このことが示すのは、カッチ性の強調とそれが象徴する王権時代への回帰である。この点は、震災後に、カッチの地域主義が生まれ、カッチ藩王時代と王権にノスタルジーが生じたことを指摘したシンプソンの研究と重なる。カッチの地域主義は、カッチの文化や地域性を考慮しないグジャラート州政府によって、復興政策が打ち出されたことへの反発から生じたとシンプソンは指摘している [Simpson 2005]。

王権が廃止されたにも関わらず、アシャプラー女神に対する供儀を行い、女神と同一化することでカッチ全体の安寧を祝福する王の役割は依然として重視されている。王が女神の肩から青草をうけとることが求められ、2005年の儀礼時のように、王が卒倒したことは、女神の祝福がうけられなかったとして、凶兆とみなされた。また、巡礼者の多くは、供儀の瞬間を見ようとして、込み合うこの期間に寺院を訪れる。外川昌彦によるベンガルの女神祭祀の事例は、王の祭祀が衰退し、民衆がそれに代わって祭礼の担い手になったことを示している [外川 1992]。しかし、カッチの事例では、民衆が担い手であるカースト祭祀と近隣祭祀、巡礼があるにも関わらず、それと並行する形で、王の祭祀も存続していると言える。

近隣祭祀に関しては、祭礼が、新しい地縁を作り出す契機となっている。それは、阪神・淡路大震災の後、地藏盆が被災者の人々にとって地縁を守るよりどころとなっていたことと類似する。

しかし一方で、郊外で行われるようになった新しい祭礼は、娯楽としても発展している。ヒル・ガーデンのガルバはその最も顕著な例である。ガルバは、グジャラート一円でガルバ・ダンスと呼ばれて、熱狂的な盛り上がりを見せている。クラブでのガルバや競技的なガルバなど、グジャラートの大都市アフマダーバードでのガルバの変化が、カッチにも普及し、震災後それが加速化したと考えられる。

郊外の移住サイトのガルバは、多くの見物人を集めている。会場内で踊る人の数よりも、会場の外側をとりまいて見物している人の数が圧倒的に多い。バイクに相乗りして、郊外のガルバ見物の梯子をする、という楽しみ方が始まっている。移住サイトの人々にとっては新しい近隣関係のまとまりの象徴であるが、見物人にとっては、刺激的な娯楽となっているのである。

王を中心とした王都としての街の性格が物理的に崩壊し、城壁内部の地域のまとまりであったガルバが衰退するにつれて、郊外の新しいガルバが発展している。それは、ブジがそれまで物理的には維持されてきた王都としての性格を失い、近代的な都市として変容していることを示している。

注

1) 震災前のカッチ社会については、[金谷 2005a, b, c, 2007] を参照。

2) これは、厳密に言うとなヴァラートリーとは別の儀礼であるとみなされている。Khanddha (シ

ヤーミーのこと)の木の根本において、剣を奉るものである。マハーバーラタに、ハスティナプールにおいて追放されたバーンダヴァが武器を14年間シャーミーの木に隠したと記載されている。ヴィジャヤ・ダシュミーの日に木から武器をとりだし、追放から戻ったという神話により、シャーミーはラージプートに崇拜されている。ブジのシャーミー儀礼では、カッチに王国を制定する前のケンガルジー 1 世がアフマダーバード王の前でライオンを刺し殺したと伝承をもつ剣を、ブジの王付きグルジー (guruji) の家系がモーティー・パトシャーラー (*mōti pathshālā*) にて保管、祭祀を行っている。1947年の印パ独立前には、王は馬車か人の担ぐ輿のどちらかに乗って剣を携えブジの街を巡行したという [Dilipsinhji 2004]。

- 3) かつては王は王宮を出て、王城の城壁にうがたれた門の一つであるパトワリー門まで歩いたという [Dilipsinhji 2004]。
- 4) かつては、ムスリムやヒンドゥーの少女たちのグループがブジの王宮に赴いて、王族の女性たちから油をもらい、ガルバの灯をともしのに用いたという [Dilipsinhji 2004]。
- 5) カッチ女性の衣服については [金谷 2007] を参照。

参考文献

- Dillipsinhji, K. S. 2004 *Kutch in Festival and Custom*. New Delhi: Har-Anand Publication.
- Fuller, and Logan 1985 The Navaratri Festival in Madurai, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 48: 79-105.
- Fuller, Christopher 1992 *The Camphor Flame: Popular Hinduism and Society in India*. Princeton University Press.
- Himmatsinhji, M. K. 2005 *The Shrine of Goddess Ashapura at Mata-no-mad (Kutch)*. Unpublished Pamphlet.
- Kanetani, Miwa 2006 Communities Fragmented in Reconstruction after the Gujarat Earthquake of 2001, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 18: 51-75.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London & New York: Routledge.
- Raheja, Gloria Goodwin 1988 *The Poison in the Gift: Ritual, Prestation, and the Dominant Caste in a North Indian Village*. Chicago: University of Chicago Press.
- Simpson, Edward 2005 The 'Gujarat' Earthquake and the Political Economy of Nostalgia, *Contributions to Indian Sociology* 39: 219-249.
- Williams, L. F. Rushbrook 1958 *The Black Hills: Kutch in History and Legend, A Study in Indian Local Loyalties*. London: Weidenfeld and Nivolson.

永ノ尾信悟 1993「プラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」『東洋文化』73: 121-163。

金谷美和 2005a「『手工芸』としての絞り染め布生産——インド染織品需要変化への生産者の対応」『国立民族学博物館研究報告』29(3): 429-466。

——— 2005b「インド・ムスリムの生業における親族と姻族ネットワークの重要性——グジャラートの染色コミュニティの事例」『国立民族学博物館研究報告』29(4): 551-586。

——— 2005c「布のつくるヒンドゥーとムスリムの社会関係——インド、グジャラート州カッチ県のオダニー（被り布）の事例より」『文化人類学』70(1): 77-98。

——— 2006「『良きムスリム』をめぐる交渉の場としてのムハッラム祭礼——インド西部地震とコミュニティ暴動後の変化」三尾稔編『インド北・西部における都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究——経済自由化、宗教ナショナリズムと宗教実践との相互連関の民族誌的把握を目指して』（平成15年度-平成17年度 科学研究費補助金 [基盤研究(B) (1)] 研究成果報告書），pp. 132-159。

——— 2007『布がつくる社会関係——インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版。

田中雅一 1994「女神たちの夜・女たちの夜——チダンバラムの九夜祭」辛島昇編『ドラヴィダの世界 インド入門Ⅱ』東京大学出版会。

- 田辺明生 1993「力の変容——インド・オリッサのラモチョンディ女神祭祀」『民族学研究』58(2): 170-197。
- 外川昌彦 1992「宮廷儀礼から民衆儀礼へ——ベンガルのドゥルガ女神祭祀における動態的記述の試み」『民族学研究』57(2):174-196。
- 中谷純江 2006「コミュニティー祭礼の変容——Ramdeora 巡礼にみる平等性への志向と拡散する権力関係」三尾稔編『インド北・西部における都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究——経済自由化、宗教ナショナリズムと宗教実践との相互関連の民族誌的把握を目指して』（平成15年度-平成17年度 科学研究費補助金〔基盤研究(B)(1)〕研究成果報告書), pp. 103-131。
- 三尾稔 1994「女神祭祀の変容——インド・ラージャスターン州メーワール地方の事例から」『民族学研究』58(4):334-355。
- 森栗茂一 1996「地蔵の記憶と震災」『季刊 Tomorrow』（あまがさき未来協会）10(4):38-73。
- 1998『しあわせの都市はありますか——震災神戸と都市民俗学』鹿砦社。
- 米山俊直 1986『都市と祭りの人類学』河出書房新社。